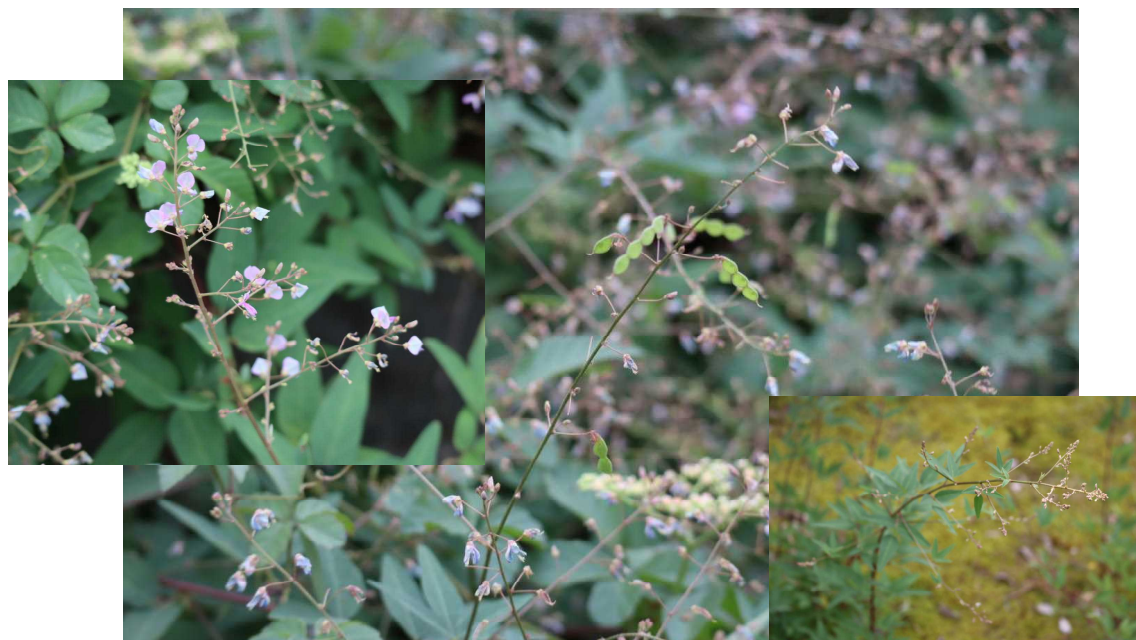


江北の四季

令和2年
9月12日
第24号



ヌスビトハギ(盗人萩)

昔の泥棒は足音を立てないように、足裏の外側だけを地面に着けて歩いたそうです。この草の実の内側がへこんだ形になっているので、泥棒の足跡に見えることから盗人萩と名付けられたそうです。実(み)は扁平で表面にかぎ状に曲がった毛が並んでおり、これが衣服などにひっついてきます。

在来種のヌスビトハギは実の数が二つですが、上の写真は実が三つから四つあります。また葉は在来種の方は柔らかな感じですが、こちらの方はつるつとしています。と言うことで、この写真の草は、外来種のアレチヌスビトハギ(荒地盗人萩)なのです。自宅近くの道ばたをあちこち探してみましたが、見つかるのは残念ながらアレチヌスビトハギばかりでした。在来種はどこへ行ってしまったのでしょうか。



生花新風体

アレチヌスビトハギ、ススキ、オクロレウカ

○第四十三候、白露(はくろ)、初候、草露白(くさのつゆしろし)。早朝、草に降りた露が白く光って見える頃。

さすがに朝夕は涼しくなってきました。

昼との寒暖差が大きくなり、大気中の水蒸気が冷やされることで朝方に露が降(お)ります。夏の高気圧も弱まり秋雨(あきさめ)前線が発生して天気も崩れやすくなりました。台風と重なると大雨となり、日本列島に被害をもたらします。そういえば九月十日は雑節の二百二十日(にひゃくはつか)で特に風が強い日と言われてきました。台風「〇号が来ましたが、それほど被害を出さずに済んでやれやれでした。



ゲンギク(段菊)

花が少なくなる9月になって咲き出します。名は葉が菊に似て花が段になっているから。丈夫な宿根草で、庭の隅に植えておけば、毎年花が楽しめます。苗も種も売られています。4月頃が種蒔きの時期です。



シオン(紫苑)

別名はオニシコグサ(鬼の醜草)、ジュウゴヤソウ(十五夜草)、オモイグサ(思い草)。



生花正風体 シオン

花の咲き具合がもう少しですが、待ちきれずに生花正風体一種生けにしました。大葉物ですので「真副の間遠く副体の間近い花形」に、和合の外で生けます。中秋の名月頃に咲くから、十五夜草(じゅうごやそう)なのでしょう。それとも名月をシオンの花の間から眺めたのでしょうか。

○中秋の月見(観月)

旧暦では七月から九月が秋です。七月を初秋、真ん中の八月を中秋、九月を晩秋とよび、日本人は特に中秋の月を愛(め)でてきました。今年は9月17日(木)が旧暦の8月1日で、この日から中秋です。コロナ禍で外出の楽しみが減りましたが、お月様は天気さえよければどこに居ても見られます。一度じっくりと中秋のお月様を愉しみませんか。お月様の变化を調べてみました。

旧暦八月(新暦)

1日(9月17日) 新月(朔 さく)

月が太陽と地球の間に入り、月は太陽の方向にあるので見えません。

英語では New Moon。

3日(19日) 三日月

三日目の月なので三日月。別名は、若月(わかづき)、夕月、眉月(まゆづき)、初月(ういづき)など。日没前後の西の空に見えます。

7日(23日) 上弦の月

半月です。別名は弓の弦を張ったように見えることから弓張月(ゆみはりづき)または弦月。弦の部分を上にして沈むことから上弦の月と呼ばれます。偃月(えんげつ)も半月の意味。京都の東寺や栗林公園などあちこちに偃月橋なるものがありますが、ど

れもその優美な形から名付けられているようです。地球から見る太陽と月の間の角度が90度になり、日没頃の南の空にみえます。時間と共に西へ移動し真夜中には西の空に見えます。

10日(26日) 十日夜(とおかんや)の月

月が丸みを帯びてきます。3日や7日と同じ時刻に見ると東の方向に移動しています。

13日(29日) 十三夜の月

もう少しで満月です。満月に次いで美しい月とされています。

14日(30日) 待宵(まつよい)の月

待宵は翌日の十五夜の月を待つ宵の意。十五夜を「望月(もちづき ぼうげつ)、望(ぼう)」とも呼ぶことから小望月(こもちづき)とも言います。

15日(10月1日) 十五夜

満月、望、望月、名月。特に旧暦八月の満月を中秋の名月と言います。ススキを飾り里芋を供えるので芋名月とも言います。

英語では Full Moon。

太陽、地球、月の順にほぼ一直線に並ぶので地球に反射する光が増え、半月の十倍以上の明るさとなります。完全に一直線に並ぶと月食となりますが、次に日本で観測できるとされる皆既月食は、2025年の3月

14日、同じく2025年6月8日、そして2026年の3月3日だそうです。お楽しみに。

16日以降の月は後日にしましょう。

○蛇足

八月一日とか九月一日とかの「一日」を「ついたち」と言うのは、新しい月が出た「月立ち(月建ち)」が語源だそうです。

○春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり 道元

春になれば桜の花が咲き、夏にはほととぎすが鳴き、秋には月が輝き、冬には雪が冷たく冴(さ)える。このように四季はおのずとめぐる。なんと(すがすがしいことなのだろうか。

この歌は、昭和43年(1968年)12月10日、川端康成のノーベル文学賞記念講演「美しい日本と私」の冒頭を飾る歌です。日本の四季を道元禅師が永平寺の夜空を眺めていて詠われたものだそうです。自然の美をありのまま、素直に賞(め)でて、春夏秋冬のその時そのときをそのまま受け入れて生活をしていくということらしいです。

川端はこの講演の中で、茶道の「雪月花

の時、最も友を思う」ことと、池坊専応が「野山水辺をおのづからなる姿」として、新しい花の心を開いたことを紹介しています。花を生けることも月を見ることも、今しかできないこととして愉しみたいものです。



ナツズイセン(右も)

スクアミゲラ

和名はナツズイセン(夏水仙)。葉と球根がスイセンに似ていて、夏に花が咲くことからナツズイセン

と言われていますが、ヒガンバナ科ヒガンバナ属で、ヒガンバナと同じように葉と花を同時に見ることはできません。葉は早春に芽を出しますが、夏になると枯れてしまいます。9月上旬になると花茎だけが伸びて花を咲かせます。花の時期に葉が無いことからマジックリリーとかハゲカユリ(裸百合)とも呼ばれます。ナツズイセンはヒガンバナ(リコリス)同様、耐寒性、耐暑性ともに高く、植えっぱなしでもよく増え、よく花を咲かせます。病害虫の発生もほとんど無く、育てやすい植物です。6月頃に球根を植え付けるだけで、その後はほとんど世話がいらないうえです。皆さん一度挑戦してみてください。花が少ないこの時期に重宝します。



立華新風体

ナツズイセン、シマススキ、ホトトギス、ヒューケラ(ツボサンゴ)、ムラサキシキブ、ドリチョスラブラブルビームーン、トキワベニバナマンサク、ヒマラヤユキノシタ。

